児童期における他者の自己意識的感情理解の発達

○山田 洋平

(広島大学大学院教育学研究科・福岡教育大学)

Key words: inferring emotion, childhood, self-conscious emotion.

問 題・目 的

他者の感情理解能力は、喜びや悲しみといった基本感情について多くの検討がなされており、感情理解の際に用いる手掛かりによって、異なる発達を示すことが明らかとなっている。例えば、笹屋(1997)によると、表情を手掛かりとした他者感情の理解は、4歳ころにある程度のレベルまで発達するが、状況を手掛かりとした他者理解能力の発達は、少し遅れて5歳ころに急激に発達することが示されている。では、より複雑な感情理解はどのように発達するのであろうか。そこで本研究では、表情及び状況を手掛かりとした他者の自己意識的感情理解の発達について検討する。

方 法

■参加者：A県内の公立小学校児童 441 名（1 年生 76 名，2 年生 74 名，3 年生 74 名，4 年生 74 名，5 年生 75 名，6 年生 68 名）と A 県内国立大学の学生 92 名（平均年齢 21.1 歳）。
 ■調査時期：200X 年 8 月末～10 月中旬
 ■課題：1) 表情課題（表情の絵のみ），2) 状況課題（表情なしの 4 コマ漫画），3) 感情一致課題（4 コマ漫画と物語に対して適切と考えられる表情の絵を使用：以下、一致課題と略す）。
 ■実験材料：取り扱う感情は、嫉妬、罪悪感、誇りの 3 感情であった。また、表情刺激の線画、物語刺激の 4 コマ漫画（各 2 話ずつ、計 6 話）は、著者自身で作成した。
 ■手続き：刺激はプロジェクターを用いて、表情、状況、一致課題の順にスクリーンに投影した。各課題において参加者には、刺激中の主人公の感情状態を自由記述形式で回答を求めた。実験は 5～7 人で行われ、所要時間は約 25 分であった。
 ■得点化：各課題の回答は、Shaver(1987)の情動の階層構造と笹屋(1997)の評定基準を参考に得点化した。評定基準は、「自己意識的感情についてよく理解している（5 点）：設定した自己意識的感情と類似の感情を述べている」、「自己意識的感情についてある程度理解している（4 点）：設定した自己意識的感情について述べているようだがうまく言語化できていない」、「基本感情について理解している（3 点）：設定した基本感情と類似の感情を述べている」、「基本感情についてある程度理解している（2 点）：設定した基本感情について述べているようだがうまく言語化できていない」、「快・不快感情について理解している（1 点）：設定した快・不快感情を述べている」、「理解していない（0 点）：無回答や設定感情と異なる感情を述べている」の 6 段階であった。

結 果・考 察

課題ごとに年齢群を被験者間要因、感情を被験者内要因として、4（年齢群：低学年・中学年・高学年・大学生）×3（感情）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、全ての課題において年齢群及び感情の主効果、年齢群と感情の交互作用が有意であった ($p < .01$)。結果を Table1 に示し、以後課題ごとの交互作用について検討する。

まず、表情課題における交互作用について下位検定を行った結果、嫉妬において大学生の得点が他の年齢群より高かった。また、罪悪感では、大学生の得点が他の年齢群より高く、高学年の得点が低学年よりも高かった。誇りにおける年齢群の得点差はなかった。次に、低・中・高学年において、誇り、罪悪感、嫉妬の順で得点が高かった。また、大学生では、罪悪感及び誇りの得点が嫉妬よりも高かった。嫉妬の表情理解得点がどの年齢群においても低かったのは、嫉妬は怒りと悲しみが複合した感情であり、表情のみの手掛かりでは正確な判断ができなかったと考えられる。

次に、状況課題における交互作用について下位検定を行った結果、嫉妬及び罪悪感において大学生の得点が他の年齢群より高かった。また、誇りにおいて大学生の得点が他の年齢群より高く、高学年の得点が低学年よりも高かった。さらに、どの学年においても、誇り、嫉妬、罪悪感の順で得点が高かった。この結果から、小学校段階における状況を手掛かりとした自己意識的感情の理解は難しいことが示された。

最後に、一致課題における交互作用について下位検定を行った結果、嫉妬において大学生の得点が他の年齢群より高かった。また、罪悪感では、大学生の得点が他の年齢群より高く、高学年の得点が低学年よりも高かった。誇りにおいては、大学生の得点が中・高学年より高く、中・高学年の得点が低学年より高かった。次に、低・中学年において、誇り、嫉妬、罪悪感の順で得点が高かった。また、高学年及び大学生において、誇りの得点が嫉妬及び罪悪感よりも高かった。罪悪感の感情理解の得点が小学校段階で上昇したのは、笹屋(1997)が示した感情理解の手掛かりの変化によるものと考えられる。

これらの結果から、自己意識的感情は感情や課題ごとに、異なる発達曲線を描くことが示されたが、おおむね児童期以降に発達することが明らかとなった。今後、その他の自己意識的感情での検討や、児童期以降の発達についての検討が課題となる。

(Yohei YAMADA)

Table 1 各課題の感情別理解得点と分散分析結果

課題	感情	低学年 (n=150)		中学年 (n=148)		高学年 (n=143)		大学生 (n=92)		主効果:年齢群 $\alpha(3,529)$	主効果:課題 $\alpha(2,1058)$	交互作用 $\alpha(6,1058)$
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
表情	嫉妬	2.67	(0.67)	2.69	(0.75)	2.78	(0.60)	3.56	(1.24)	32.83** 低・中<高<大	193.61** 嫉妬<罪悪感<誇り	3.82**
	罪悪感	3.09	(2.10)	3.22	(1.99)	3.56	(1.91)	4.47	(1.28)			
	誇り	4.40	(1.37)	4.43	(1.36)	4.71	(0.94)	4.81	(0.74)			
状況	嫉妬	2.49	(1.22)	2.50	(1.08)	2.53	(1.14)	3.73	(1.30)	92.23** 低・中・高<大	320.58 罪悪感<嫉妬<誇り	2.91**
	罪悪感	1.47	(0.92)	1.71	(1.18)	1.41	(0.99)	2.42	(1.44)			
	誇り	2.96	(0.74)	3.23	(0.97)	3.48	(1.07)	4.26	(1.15)			
一致	嫉妬	2.33	(0.79)	2.33	(0.85)	2.35	(0.96)	3.79	(0.85)	124.19** 低<中・高<大	504.93** 罪悪感<嫉妬<誇り	11.06**
	罪悪感	1.76	(1.29)	2.01	(1.46)	2.26	(1.59)	3.77	(1.10)			
	誇り	3.99	(1.14)	4.41	(0.98)	4.43	(1.03)	4.89	(0.45)			

** $p < .01$